

業務報告書

令和2年度エコパートナー環境学習等業務委託事業

SDGsをテーマとしたオンライン環境講座運営業務

未来につなぐ暮らし方

実は身近なSDGs

令和3年3月

一般社団法人ネクストステップ研究会

オンライン環境講座：市民生活とSDGs

実施内容

講座は、SDGsを身近に感じられるよう講座名を「未来につなぐ暮らし方 実は身近なSDGs」として、別紙広報チラシで示した3回の講座と2回のプレ講座を企画して行った。各回の手法、実施日時、内容は以下のとおりであった。

第1回

- ・タイトル SDGsって私の暮らしとつながっているの？
- ・ねらい SDGsについて知り、自分の暮らしとの関係に気づく
- ・手法 コーディネーターと4人のゲストがZoomを使ってSDGsに対する考えを深める様子を、YouTubeで視聴してもらう。途中、気づいたことや質問はチャットで伝えてもらい、後半に4人のゲストからコメントをもらう。
- ・日時 10月28日（水） 午後7時～9時まで
- ・配信方法 YouTubeライブ 後日の視聴も可能
- ・ゲスト

狩野大翔さん（四日市大学4年生）

食品ロステーマに研究中。地域政策にも関心を待つ地元の大学生

上 麻理さん（株式会社うつべ農園取締役社長）

四日市市内で若手農業者による米作りを推進しており、SDGsにも関心がある事業者

堺 勇人さん（環境市民プラットフォームとやま事務局長）

富山市を中心にESDやSDGsの普及啓発に取り組んでいる

山村水帆さん（三重大学非常勤職員）

伊勢市在住、子育て中のママ。子どもたちの未来を拓く活動を思案中

- ・申込者数 29名

・講座内容

<事前準備>

まず、ゲストには、資料1に示した内容を事前に依頼し、やっていただきたいことや講座のねらいを伝えておいたうえで、参加してもらった。

<当日の流れ>

- ① 当日は、開始15分前にズームでゲストとつなぎ、事前打合せを行った後、資料2に示したパワーポイントを画面共有しながら講座を進めた。
- ② まず、第2回からのズームの活用を想定し、最初にオンラインでの対話のエチケットについて説明
- ③ 次にゲストとファシリテーターの自己紹介
- ④ SDGsについての説明
- ⑤ タイトルである「SDGsって私の暮らしとつながっているの？」について、

ゲスト4名から自分の活動をSDGsの各目標とのつながりを意識して話してもらった。

4名のゲストの話された主な内容（資料2 p5のppt参照）

○山村さんの話

未曾有の自然災害や新型コロナで大きく暮らし方が変わってきている。このような中で育っていく子どもたちに「生きる力」を育める環境を作ってあげたいと思っている。自分の住む三重県南部には、豊かな自然があり、水産業、農業者さんのフィールドで子どもたちが自然体験や創作表現のできるプログラムを作って行きたい。このことを考えていると、いくつものSDGsの目標と繋がっていることがわかる。

まず、教育プログラムは、質の高い教育（SDG4）に繋がり、SDGs14（海の豊かさを守る）、15（陸の豊かさを守る）に繋がる。また、SDGs9（地域の産業を守り）、5（ジェンダー平等）にもつながり、さらに他の目標にもつながっていくと思った。

○狩野さんの話

自分は今、大学で食品ロスの研究をしている。食品ロスを出さない暮らし方は、SDG12（つくる責任、つかう責任）に直結している。この目標を達成してくると、海の豊かさや陸の豊かさを守れる（SDGs14,15）し、SDG2（飢餓をゼロに）にも関係している。さらに、この活動を知らせていく教育はSDG4やSDG11（街づくり）にもつながっていくと思う。

○上さんの話

私は、特にSDGsを意識して活動していなかったが、米農家として子どもたちの農業体験、里山農業を守る活動、また、子ども食堂へお米を提供する活動を行ってきた。これらの活動は、SDGsの各目標との関係で整理してみると、SDG4やSDGs1,2（飢餓や貧困をなくす）に直接つながっているし、SDGs11,12,13（地球温暖化防止）、15にもつながっていく。SDGsを知ることで、自分の活動が整理できた。

○堺さんの話

私は、富山市で持続可能な社会を築くために、あらゆる主体がSDGsを交通の未来像と認識するための普及啓発活動を行っている。そのためのパートナーシップ構築（SDG17）をサポートする活動をしている。最近では、お寺でSDGsの話をすることもある。そんな活動なので、全ての目標が繋がっている。

⑥ この後、来ていた質問に答えられる範囲で、ゲストに答えていただいた。また、質問については、後日、文書で回答を作成し送付した（資料3）

・アンケートから見た参加者の反応

講座終了後、すぐにオンラインでアンケートを実施した。また、ライブで講座を

視聴できなかった人のため、内容は1週間程度視聴できるようにして、その後アンケート集計を行った。結果は、資料4のとおりであった。

アンケート結果を見ると次のようなことが分かった。

- ① 実施時間は、平日の夜で良かった
- ② 実施方法は、視聴のみと、双方向での意見交換ができるもので意見が分かれた（2，3回は双方向で意見交換ができる方法で実施）
- ③ 今後のオンラインによる講座と対面による講座の希望については、ややオンライン講座を望む声が多かった。
- ④ 講座の視聴は、ほぼ問題なくできたようである。
- ⑤ ゲストの話は、多くの方が参考になったと回答している。
- ⑥ ねらいの一つであった講座を視聴しての気づきは、ほぼすべての参加者があったと回答した。
- ⑦ 気づきの内容については、質問7の回答に示したとおりであるが、SDGsの見方がわかり、自分の生活と考え合わせた気づきが多かった。
- ⑧ SDGsへの理解では、全員が上がったと回答しており、もう一つのねらいも達成できたと考えられる。
- ⑨ 自分の暮らしの中で何かに取り組んでみようとする行動変容の兆しが見られた。
- ⑩ SDGsについて知りたいことについては、質問10にいくつか書かれていたので、文書で回答した（資料3）

・第1回を振り返って

初めてのオンライン講座で、視聴者の様子がすぐにはわからない中での講座は、対面による講座にはない難しさを感じた。そんな中、今回多様な立場の4名のゲストを依頼し、ゲストとのキャッチボールの形で講座を進めたのは良かったと思う。ただし、SDGsの各目標を説明すると時間がかかり、視聴者の興味をつなぐことが難しかったかもしれない。このことについては、対象者が明確な場合には、その対象者の興味関心が高い課題から入って、視聴者自らがSDGsの各目標やターゲットを読んでみようとする方向に誘導する方法が良いのではと思った。

なお、講座のねらいであったSDGsの考え方を知る、自分とのつながりに気づくことについては、ほぼ達成できたように思う。

なお、オンラインで実施し、時間帯が昼でなかったことにより、参加者の層は従来とは大きく変わり、女性や若者が増えた。



図1 4人のゲストとのトークの様子



図2 オンライン上でpptを使ってゲストが自分の活動とSDGsのつながりを説明

第2回

- ・タイトル スマホとSDGs
- ・ねらい 現代の生活には欠かせなくなっているスマホの生産過程を通して、私たちの生活と世界のつながりを考え、エシカル消費へと繋げる。
- ・手法 Zoomによるオンラインワークショップ
- ・日時 11月18日(水) 午後7時～9時
- ・参加者 11名
- ・備考 ズームへの接続環境確認と、ワークショップ(双方向のやりとり)について、1週間前(11月11日)に、プレ講座を実施

- ・プレ講座 第2回講座実施の一週間前(11月11日(水)午後7時から)に、プレ講座を実施した。プレ講座では、基本的なZoomの使い方と講座で活用予定のスプレッドシートの共有方法について説明した(資料5参照)。

・講座内容

この回の講座は、DEAR(認定特定非営利活動法人 開発教育協会)が制作したスマホから考える 世界・わたし・SDGsを基に、オンライン講座用に変更して実施した。

当日の流れ

- ① まず、アイスブレイキングを兼ねてスマホに関するクイズを行った。
- ② 次に、スマホが原料から私たちの手元に届くまでのプロセスを、スプレッドシート上でカードを並べ替える方法で参加者に考えてもらった。

1班	スマホができる順にイラストを並べ替えて!				
					
					

- ③ この後、原料生産地の一つであるコンゴ民主共和国で起こっている問題について、動画を見てもらった。内容は、レアメタルの採掘をめぐる紛争とそれに伴うレイプの発生に立ち向かうノーベル平和賞受賞者(ムクウェゲ医師)の話と希少生物東ローランドゴリラの生息環境の悪化の話
- ④ 次に、これらの解決策の一例として、紛争鉱物のトレーサブルの方法、事業者の取り組み、フェアフォンやエシカルスマホキャンペーンについて紹介した。
- ⑤ この後で、スマホをつくる責任とつかう責任(SDG 12に関係)について、グループに分かれて話し合ってもらった。

- ⑥ 出てきた意見は、パワポにまとめた。
 - ⑦ 最後にまとめとして、知ること、気づくことがスタートで私たちの消費活動が変わることを話して、次回につなげた。
 - ⑧ (使用したパワポは、資料6参照)
- ・第2回振り返り(資料7 第2回アンケート結果参照)
- プレ講座も行ってあったので、Zoomの使い方やスプレッドシートの使い方も問題なくできた。
- スマホを通して、自分の身近が使っている製品が世界と繋がっていることをしっかりと気づいてもらった。そのうえで、SDG12 つくる責任とつかう責任について、深く考えてもらえた。
- SDGs目標間のつながりについても、全てが繋がっていることを多くの受講者にわかってもらえた。
- また、若い人の参加(高校生)があり、参加者間で刺激を受けてもらうことができた。

第3回

- ・タイトル 明日、何を着ますか？～ファッションとエシカル～
- ・ねらい 衣服をエシカルに着こなしていくには、どうすればよいかを考える
- ・手法 ズームによるオンラインワークショップ
- ・日時 12月2日（水） 午後7時～9時
- ・参加者 8名 欠席2名 キャンセル1名
- ・備考 第2回同様、1週間前（11月25日）にプレ講座を準備した。

・プレ講座

第3回の参加者は第2回の参加者と重複しており、また、第3回で使うオンライン技術（Zoom とスプレッドシート共有）は第2回と同様であったため、ワークショップの方法ではなく参加者交流をメインにプレ講座を実施することを情報提供して参加を待ったが、参加者はなかった。

・講座の内容

資料8に示したパワーポイントの流れに沿って講座を進行した。

まず、最初にアイスブレイキング兼ねて衣服に関するアンケートをZoomの投票機能を用いて行った。



Zoomの投票機能を使って、その場でアンケート結果を共有

次に、衣服（ファッション）の1970年代からの遷移を説明。流行の移り変わりに伴って多くの衣服が捨てられていることに気づいてもらった。

さらに、各参加者が持参した衣服の品質表示タグを見ながら、私たちの衣服がどこで作られているかを考えた。ほとんどが海外（特に中国と東南アジア）で作られている。

次に、服の生産から消費、廃棄までの情報を提供して、それぞれの段階でどのような問題があるかを班に分かれて考えてもらった。

各班から出された主な問題点

服の一生に関わる問題を考えてみましょう！					
	糸の生産	生地加工	縫製	流通消費	廃棄リサイクル
名前					
A	農地は適正に管理されているのか (農業が心配) 十分な生産量は確保されているのか	染色で出る水の処理が適正にされているのか	生産量が減ると技術の伝承が心配		
B	綿などの農作物のために野生動物の住処が奪われてしまっていないか 石油の加工の際に環境をおせんにしていないか		労働環境や賃金は適切なのか	服を輸入したり運んだりする際の排気ガス	
C	水を大量に使う	染料で土壌汚染	低賃金で雇われ長時間労働させられる		
D	労働している人の環境、年齢	加工工場環境、立地、運営	環境、労働時間、賃金、		

< 1 班 >

服の一生に関わる問題を考えてみましょう！					
	糸の生産	生地加工	縫製	流通消費	廃棄リサイクル
名前					
A	栽培における薬の大量消費	労働環境	労働環境	低価格	廃棄
B	途上国の低賃金労働 農業被害 児童労働	途上国の低賃金労働 人権 染料による汚染	途上国の労働力	需要を大きく上回る過剰生産	大量廃棄
C	農薬の使用は？気候変動に耐えられるの？	染色の水質汚染は？	繊維を肺に取り込んでしまいそう	どうしてこんなに安い？	

< 2 班 >

服の一生に関わる問題を考えてみましょう！					
	糸の生産	生地加工	縫製	流通消費	廃棄リサイクル
名前					
A	動物虐待・土壌汚染	薬品仕様・水質汚染・労働力の搾取	労働力の搾取・職場環境・労働者の賃金・労働時間	適正価格・流通工程・	流行・大量破棄・
B	農薬が使われてないか	賃金が安価では	賃金が安価では	流行による大量消費	流行による大量廃棄
C	生物への負担	工場の設立、糸を製造する際に発生した物質による公害	過労	安いものを買ってしまい、もちが悪く、買いすぎる	
D	農薬使っていないか			洗った時、洗剤やプラスチックのごみはどうなる？	いっぱい捨てられてるのは

< 3 班 >

各班から出された問題点を共有したあと、ファシリテーターがそれぞれのプロセ

スにおける課題を整理、SDG12に関わる衣服の持続可能な生産と消費とはどのようなものか、エシカル消費という言葉を出して問題提起した。

持続可能な服の消費について、「いまずぐできること」と「2030年までになってほしい姿」について、再度班に分かれて話し合った。

その後、各班の意見を共有して講座を終了した。

各班で出された意見

	すぐにできること	2030年までにそうなってほしいこと
環境	四日市市の場合、資源ごみとして出せる。最終どの様な形になっているのか？クッションの中身？	
	西宮市は売れる商品程度の物でないと市のごみとして回収されない	
	リサイクル	
	子供服はあげる、NPO法人通じて海外へ寄付	
社会	アパレルメーカーが、古い衣類を回収して、再利用している	古い衣類を回収して、再利用する が当たり前になっていて欲しい
地域	ハンドメイド作品販売アプリ等を利用する。	

< 1 班 >

	すぐにできること	2030年までにそうなってほしいこと
環境	必要なものだけ買う	自然に「誰も傷つかない消費」ができるようになっていく
	ムダな消費をしない	天然素材がもっと戻ってきてほしい
	買わないという選択肢もある	人の手で(伝統技術...)
	今あるものを大切に	新品神話終わっている
	新品にとらわれない(リユース促進)	着る人にも作る人にも優しい・安心
社会	リメイク・アップサイクル	
	古くなる良さ、自分だけ(オリジナル！)	
	自分で育てる楽しみ(衣類も)	
	古着を買う→かっこいい！	
	リサイクル素材を積極的に購入する(使ったあとも責任)	
地域	流行に踊らされない	

< 2 班 >

	すぐにできること	2030年までにそうなってほしいこと
環境	オーガニックコットンや環境配慮マークを見て選ぶ	マイクロプラスチックが流れないようにしている。
		自然素材で、全て染色されている
		すべて、自然素材がリサイクルできる
社会	制服をなくす	外国人の人と差をつけない賃金
		適正価格にする(無理に安くしない)
地域	フェアトレード商品を売る店を作る	地元の材料でできている物は安く買える。
	どこかにリサイクル商品があって、自由に借りて戻す。	

< 3 班 >

終了後、3回の講座を通してのアンケート記入を依頼するとともに、残ることが可能な方で30分程度の交流会を持って終了した。

・第3回及び講座全体振り返り（資料 第3回アンケート結果より）

- ① 第3回の目的であった衣服のエシカルな消費については、質問4, 5に対する回答を見ると、理解するとともに行動変容の糸口もつかめたと考えられる。
- ② また、仕様書に示されているオンライン講座全体の目的である「市民へSDGsの普及を図るとともに、環境に配慮した行動の推進を図る」ことについても、質問2, 3やその他の項目に対する回答結果からほぼ達成されたものと考えられる。

・今後に向けて

コロナ禍の中にあっても、環境教育、SDGsへの理解促進を図るため、オンラインでの事業を実施したのが今回の講座の大きな特徴であった。実際実施してみて次のような気づきがあった。

- ① 若者や女性の参加が増えるなど、従来対面で四日市公害と環境未来館やなやプラザなどで実施していた講座とは、違う層の市民の参加があった。
- ② オンラインに不慣れた市民への配慮について、Zoomの使用について説明するプレ講座も設けて講座を実施したが、実際の参加者はZoomを使用した経験のある方ばかりで、市民への広がりには、オンライン操作への慣れが課題である。この課題は、環境以外にも共通してみられることであり、市民のオンラインスキルを上げることが、どの分野においても必要と思われる。なお、慣れてしまえば年齢に関係なく活用できる。
- ③ その一方で、距離のバリアがなくなり市外からの参加希望があった。
- ④ 運営側としてもはじめての経験であったが、オンライン、対面の講座には、それぞれメリット、デメリットが感じられ、コロナ後も両者をうまく組み合わせ活用していくことが必要と思われる。